地域文化

「谷深ければ山高し」

ガンサバイバーの挑戦

井野口房雄
インキュベーション＆リボーン代表取締役

ガンの宣告

4年前の東日本大震災の年、多くの人が復興に一所懸命になっている中で、私にできる挑戦として下関海響マラソンに初参加をしました。その後、フルマラソンを5回完走していた元気な私に、昨年の8月、突然、右腎臓ガンの宣告です。戸惑って言われたことがよくわからない内に、手術の日が決まり、私の人生どうなるの？

どう考えても、千の風にはなれない。それからの出張先で、のどかな田舎で幸せそうに暮らしている人を見て、とめどなく涙が出ました。人生の危機、死を初めて意識しながら手術までの間に肺、脳、骨への転移の検査を受け、結果、転移なし。ガッツポーズです。手術さえ乗り切れば、新たな人生にチャレンジできるチャンスを得ました。

手術は5時間を要し30㌢の開腹となりましたが、体の中にいたテロリストは一掃でき、定期検査と共に順調に回復しました。幸運な早期発見、何とか助かりました。

ガンサバイバーとして1年、これまでの私の夢であり、成し遂げたかったことである念願の東京証券取引所マザーズへの株式上場、県内創業者の広域的な交流会、出身地となる島根県浜田市での創業カレッジの担当などが実現。なぜここでこのようなハイリターンが！

神様は試練だけを与えないものです。「谷深ければ山高し」100倍返しです。リターンは、これからも、まだまだ続きます！

死ぬ以外かすり傷

この1年で学んだことは、一度しかない人生、ハッキリしていることは、産まれてきた、そして死ぬ、ということ。その二つを結ぶ1本の線が人生であり、その上に立っている今、本当に私がやりたいこと、できること、やらなければならないことを進めているかどうか。自分の使命感となるものを自分で決意し取り組んでいるか。そのことに努力していなければ、一度しかない人生の価値がないし、神様も味方してくれない！

私は今、経営コンサルティング会社の代表者として、起業家のための創業塾の講師として、また事業家として中国・上海でのアパレル事業と上場企業の取締役の業務を進めています。人生後悔しないように、やりたいこと、できること、必要とされていることに、死ぬ最後まで挑戦することを決意しています。

人生は結果ではなく、生き方にあると考えています。挑戦する生き方が大事であり、過去の失敗や今後の不安、お金や人間関係のストレス、そんなことはどうでもいいこと。死ぬこと以外かすり傷！

6回目の海響へ

ガンサバイバーである私自身を隠すことなく、このような「谷深ければ山高し」のような挑戦する生き方、このことが多くの人の勇気になればと考えています。

今年11月1日の下関海響マラソンは、6回目のフルマラソンとなります。ガンバです！

◇

いのくち・ふさお　島根県浜田市出身。ヤンマーディーゼル㈱本社人事部などに勤務経験がある。23年前から防府市に居住し、現在は経営コンサルティング事業などを手掛けている。防府市華城中央。58歳。

次回は井野口さんの紹介で、光市の安部恭子さんが担当します。

ららら俳句Café　16

杉山　久子

「山口にて」という相聞句集があります。山口県を代表する俳人、上野燎、上野さち子さんご夫婦の合同句集です。俳人夫婦は世に数組あれど、相聞句集というのは珍しいのではないでしょうか。

お二人の恋人時代から、結婚後の月日、さち子さんが逝かれて、さらにその後の年月と年代を追ってそれぞれの句が収められています。

別れねばならない橋の今日も蛍　燎

いっときも離れたくない恋人同士の時間。

すすき中唇吸へば日が散乱す　燎

ひび荒き唇をもて覆はれぬ　さち子

みずみずしい抒情を湛えた青春時代の句は、合わせ鏡のように輝いています。

美しき相聞句集　ある夫婦のかたち

やがて結婚。

涼風の一日夫を母にかへす　さち子

蕗煮るや帰りし夫にはや囚はれ　さち子

生活の中での細やかな喜びとも愁いとも思える微妙な感情。さらりと詠まれていますが、非常に深い句だと思います。

強く泣けよ原爆ある世に生れし子よ　燎

梅雨夕焼弾み出すまで子を洗ふ　燎

良夜にて子がひるがへり透きとほり　燎

子の怒る瞳の夫に似て十二月　さち子

子供を通して、世界を視、お互いを視る、その循環のあたたかさを読者も享受しうか。「大寒」「梅雨夕焼」「青き踏む」「菊の酒」という季語に、いわく言い難い思いが託されています。

鷹来しと女に告ぐる野分あと　燎

鷹見たることをぽつりと月の夫　さち子

これもまた同じ場面を双方から詠んだ合わせ鏡のような句ですが、若いころの輝く衝動とは違う、年月を重ねた二人の阿吽の呼吸のようなものを感じて、ここにはとても静かな、しかし豊かな時空が描かれていることを確認しました。

妻が逝き師も逝き柚子の湯に沈む　燎

髭剃らぬその後の月日額の花　燎

浅利飯豆飯わたしにも炊けて　燎

雛納むらし朧なる紙の音　燎

平成十三年、さち子さんは他界されました。

本書のあとがきに燎さんは書いておられます。

「生涯の妻であり、恋人で、同志で、論敵ですらあった、さち子のことを書きたい」。その後の月日を、燎さんはいつもさち子さんと対話しながら暮らしておられるような気がします。

ご夫婦が立ち上げられた「すばる句会」は、山口の地で五十周年を迎えました。この地に根を張り、後進を育てながら、句境を深めてこられたお二人の、これは土地と人ともちろん俳句と、そして何よりもお互いへの愛情に満ちた句集です。

（第3日曜日に掲載）